sensu lato (Umbelliferae) based on restriction site variation of chloroplast DNA. J. Jpn. Bot. **79**: 79–90.
Miquel F. A. W. 1867. Annales Musei Botanici Lugduno-Batavi. **3**. C. G. van der Post, Amsterdam.
Nakai T. 1937. Notulae ad plantas Asiae orientalis (II). J. Jpn. Bot. **13**: 471–491.
大橋広好，伊藤隆之 2004．ナデシコ科の新帰化植物イワコゴメナデシコ．植物研究雑誌 **79**: 376–378.
——，根本智行，伊藤隆之 2003. ハギ属の帰化植物 4 種．植物研究雑誌 **78**: 50–54.
——，——，—— 2004．マメ科の新帰化植物ナガバメドハギ（新称）．植物研究雑誌 **79**: 378–380.
Ohba H. 1999. *Bupleurum* L. *In*: Iwatsuki K., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.), Flora of Japan. **IIc**: 275–277.
大井次三郎 1953．日本植物誌．至文堂，東京.
——，北川政夫．1992．新日本植物誌 顕花篇．改訂版．至文堂，東京.
Ohwi J. 1965. Flora of Japan. Smithsonian Institution, Washington D. C.
Yabe Y. 1902. Revisio Umbelliferarum Japonicarum. J. Coll. Sci. Imperial Univ. Tokyo **16** (4).
Yamazaki T. 2001. Umbelliferae in Japan I. J. Jpn. Bot. **76**: 137–150.

([a]東北大学附属植物園津田記念館，
[b]愛媛県立西条高等学校)

新　刊

□本間建彦：**「イチョウ精子発見」の検証 平瀬作五郎の生涯**　292 pp.　2004.　￥2,300.　B 5 版．新泉社．ISBN: 4–7877–0415–X.

わが国の近代植物学発展の初期，平瀬作五郎によるイチョウの精子発見は，植物系統学上の世界的な業績として知らぬものはいない．彼は東大理学部の図工だったが，用器画の教科書を出版するなど，その方面でも知られていた．ところがイチョウの業績発表の後，彼は東大を辞職して中学校の教師となり，その後は研究者としての仕事はほとんど見られないまま終わった．退官前後の事情は謎に包まれたままである．著者はノンフィクション作家としてこの点に関心を持ち，多くの資料を猟渉して推理を積み重ね，本書を公表したものである．

前半は平瀬の生い立ちから東大へ勤めるようになるまでに，彼の精神的成長に影響を与えた諸事件，とくに武士社会の崩壊，黒船による開国，明治維新などの時代背景が丹念に描写されている．後半はイチョウの精子発見のいきさつ，平瀬をとりまく人々の動き，退職から晩年までを物語る．ノンフィクションだけあって，普通の小説ならたくさん登場するであろう人物の架空の行動や心理描写は一切なく，著者の推理のみによって話が進行する．著者がしばしばこぼしているように，平瀬は自分の個人記録を残しておらず，周囲の人々による資料もほとんどない．彼の墓もどこにあるのか分からず，菩提寺とみられる福井の寺も戦災で焼失しているという．

同じ頃起こった矢田部良吉の非職とともに，平瀬作五郎の退官の事情は謎に包まれている．私も昔，国立科学博物館植物研究部に保存されていた個人の往復書簡の中に，その間の事情を知る手がかりがあるかと探ったことがあるが，得るところはなかった．本書は栄光と挫折を身をもって体験した平瀬作五郎氏の業績を，改めて想起する資料としてお薦めする．

（金井弘夫）

□吉田外司夫：**ヒマラヤ植物大図鑑**　800 pp.　2005.　￥13,000.　山と渓谷社．ISBN: 4-635-53031-8.

地域としてはパキスタン，インド，ネパール，ブータン．チベットにわたる，主として中高度から高山帯におよぶ顕花植物の，花を主体にした植物図鑑である．まず36頁にわたってヒマラヤの植物地理，ヒマラヤ山脈の地域区分，ヒマラヤの植物の水平分布と垂直分布などと題して，地域ごとの概念図を示した解説があり，ヒマラヤの地形や植物の全貌をつかむのに都合がよい．文中の植物名には図版の出現頁が一々示されており，つまりこの図